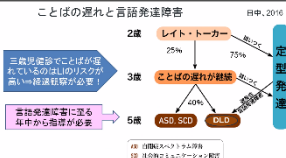
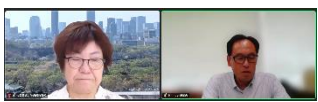


新潟県特別支援教育研究会

言語・難聴部

1 講師紹介 	言語・難聴部 副部長 山崎 勝之様から、今回の講師をしていただき、NPO 法人どこでもことばドア代表/大阪芸術大学特任教授 田中 裕美子様に関する紹介をしていただきました。
2 講演会  ことばの遅れ・言語発達障害のタイプ A: 聴覚、聴覚神経系の障害による二次的障害 B: 知的障害やASD(自閉症スペクトラム障害)に伴うもの C: 脳の言語中枢に不具合があると推定される (原因が明らかでない) レイト・トーカー (ことばの遅れ12-3歳児) DLD/SLI (特異的言語発達障害) LD/RO (学習障害・読み書き障害) ※BかCの判別には子どもの行動や言語反応で判断しないと行けない 重症も少なくない※本人の自覚が問われる ことばの遅れと言語発達障害 田中, 2016  3歳児健診でことばが遅れている子どものリスクが低い→経過観察が必要！ 5歳児 言語発達障害に至る 4歳児から指導が必要 4歳児 言語発達障害に至る 4歳児から指導が必要 Top-downの遅れと活動の構造化  Top-down I 部 - Decoding(聴く・復唱する) - Map(構造化) - Self monitor II 部 - Decoding(聴く・復唱する) - Retelling - 読解の推測・応用 - Self monitor	講師の田中様より、「子どもの言語の問題とは～発達性言語症（DLD）の理解と支援～」という演題で講演をしていただきました。田中様からは、ことばの遅れ・言語発達障害のタイプ、具体的な事例を交えて学習言語指導について丁寧にお話ししていただきました。 ① レイト・トーカー（Late Talker：L T） 初語や二語文に遅れがあり、語彙数50語以下の2～3歳児。知能、運動発達、理解に遅れはなく、対人関係などにも問題はないのにもかかわらず、表出面が低い子ども。そのうち75%は3歳までに追いつくが、15～20%は言語発達障害に至ることを教えていただきました。 ② 発達性言語症（DLD）について 複雑な脳機能障害による言語障害で、母国語を定型児と同じ方法と速さで習得できないこと、言語の発達障害が継続し、指導が必要になる子に対しては、教材レベルの調整と併せ、その子の力をいかに伸ばしていくかという視点をもって指導することが重要であると説明していただきました。 ③ 事例を踏まえて 具体的な事例を踏まえ、アセスメントの様子を動画で紹介したり、詳しく事例を紹介したりしていただきました。語想起困難等、学習言語の習得のつまずきと捉え、学習言語の習得は年中～学童期に指導をする必要があることを教えていただきました。 ④ 学校での学習言語指導について 子どもに指導の効果を実感させること、音声言語と書字言語、思考や学習のための学習言語の指導が大切であること、さらに、教科書カリキュラムに沿って学習言語を伸ばすために活用していくことが必要であると教えていただきました。文レベルでの理解や表出を伸ばしていく必要があり、そのためには、説明させる活動が比較的取り組みやすく有効であることを学びました。指導効果は子ども一人一人の実態やメタ認知レベルによって異なること、また、概要や語の意味についての具体的な指導方法についても詳しく教えていただきました。
3 質疑	講演中や講演後、質疑の時間があり、出席者から質問が出されました。田中様からは、分かりやすく解説していただきました。
4 終わりの言葉 	県言難副部長 大瀬 孝志様から、講師への感謝の言葉を述べていただき、会を終了しました。 今回の研修会に多くの方からご参加いただき、ありがとうございました。

